

立命館大学理工学部 正員 春名 攻
 (株)長大 正員 正岡 崇
 立命館大学大学院 学生員 長谷川 匠一
 立命館大学理工学部 学生員 ○寺田 英樹

1. はじめに

今日のような多様化社会の到来に伴い、大都市から比較的離れた地方都市においても魅力ある地域づくりが求められるようになってきている。また、優れた景観をもつ地域が整備されることにより地域住民の定住化も高まり、これが呼び水となり地域全体のイメージの向上にもつながり、訪問者の数も増加することが考えられる。

一方、地域開発が進行すると地域全体の景観イメージが大きく様変わりし、その地域が伝統的に持ってきた特徴をなくすという問題が存在すること多い。こうした問題の解決方法として、プロジェクトの初期段階で、地域の変化に最も敏感に反応すると考えられる地元住民の意向を把握し、できる限り住民に受け入れやすい(歓迎される)景観づくりを行うという「ボトムアップ的なアプローチ」により、景観整備の検討を進めていくことが必要であると考えた。

そこで本研究では、住民が対象地に望む景観のイメージ要因を把握し、かつ空間を評価する場合にどの空間構成要素に影響を受けているかという点を捉えることにより、地域を代表する地区の景観整備目標を設計することを目的とした。

2. 地区景観整備計画のための方法論の構築

(1) 地区景観整備計画のプロセス

地区景観整備計画は、計画検討の初期的段階から、計画的検討の進捗と歩調を合わせたかたちでの景観的検討が必要であり、都市・地域計画の各計画段階に対し合目的、効率的に各検討作業を行う必要があると考えた。

したがって、対象とする地区における土地利用、空間利用や施設整備段階で具体化される設計案を、都市・地域計画のマスタープラン策定段階において、先取的に十分に検討を加えておくことが必要である。そして、都市・地域計画に沿ったかたちでの景観整備計画を策定し、より魅力ある空間を効率

よくデザインすることができるよう配慮することが必要であると考えた。さらに、地域を構成している複数の景観について、このような作業を行なうことが魅力ある地域にするための重要な方法の1つであると捉えることとした。

このような考え方にもとづいて、都市・地域計画における地区景観整備のプロセスフローを図-1に示した。

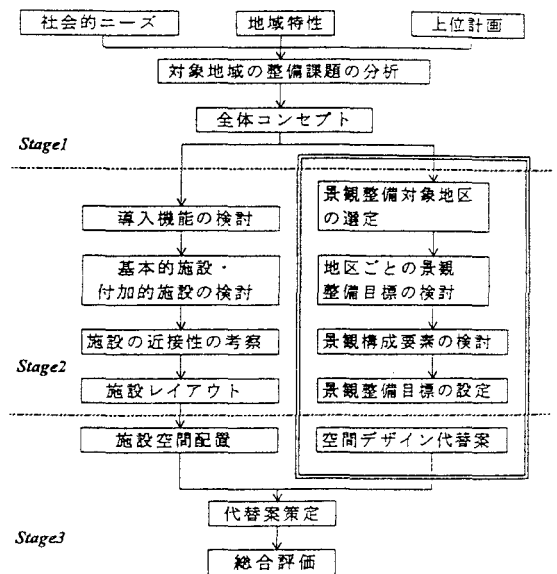


図-1 地区景観整備のプロセスフロー

(2) 対象地域における景観の類型化

都市・地域を形成している景観は、一般に多種多様に存在しその構成も複雑である。また、地域全体では様々な地区特性を持っているため、その全てを対象に検討を行なうことは、作業量が膨大になり現実的には困難である。そこでこうした問題を解決する方法として、地域の景観を総合的に設計するために景観の類型化を行なって集約し、その中から代表的な空間を取り上げて、それらに対し景観計画の検討を行なうことが効率的かつ効果的であると考えた。つまり本研究では、対象地域の構想計画段階で与えられる将来像、および土地利用計画等を考慮し、さらに既存の景観資源を有効に利用した形での地区景観分類を行なうことができると考えたのである。また、景観整備を実施する対象地選定に関しては、先に述べた景観分類の考え方を考慮し、都市整備に対する意識調査によって明らかにされたニーズを反映させた形で景観整備の検討対象地区を選出することとした。

3. 地区景観整備目標の設計方法

(1) 空間に求めるイメージの検討

景観設計を行なう場合には、その初期段階において人々が空間に求めるイメージを先取的に検討し、空間をデザインする段階の基礎的な情報としてとりまとめ、後続の景観設計作業に提供する必要があったと考えた。

また、個人の評価意識をもとに分析を行なうには、アンケート調査にもとづく方法が最も簡便で現実的なアプローチであると考え、よって、ここでは景観整備目標を策定するためにアンケート調査を実施して、その調査結果の分析を行なうこととした。

図-2に本研究で行なう地区景観整備目標策定のためのプロセスと分析方法を示した。

(2) アンケート調査項目の設計

本研究では対象空間の多様性を考慮して、SD法による実験を行ない、空間の意味構造の定量的把握を行なった。また、ふさわしい空間のイメー

ジから連想する景観構成要素の選択結果にもとづき、空間のイメージをより具体的かつ物理的に把握することとした。

なお、地方部における都市開発においては、対象となる地域に古くから生活を営んでいる住民が多数いる。そのような地域住民は身の回りの周辺環境を熟知しており、開発による環境変化に対して敏感であるため、対象地域の住民を中心的な調査対象として設定した。

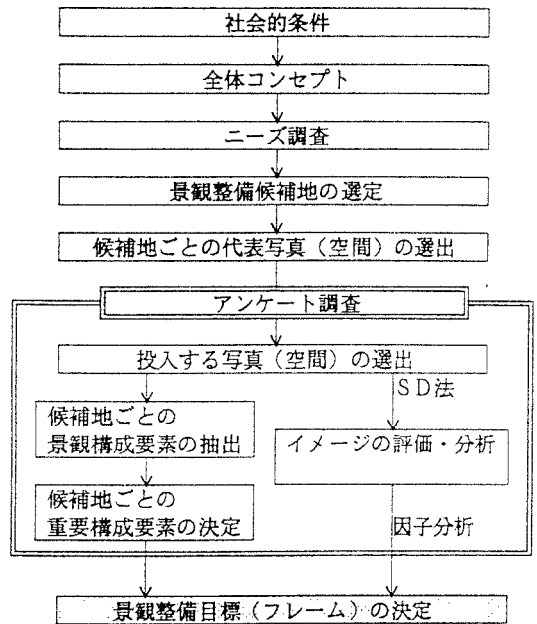


図-2 地区景観整備目標設計のためのプロセス

(3) 分析の内容

本研究の地区景観に関する分析は、以下に示すような①各地区に求めるイメージの把握、②仮想空間から抽出する魅力ある景観構成要素の抽出、の2つから構成されている。

①地区に求めるイメージの把握として、言語評価尺度によるSD評定によって得たデータに対して因子分析(基準バリマックス回転)を適用して共通因子の抽出を行なった。そして、各因子の評価尺度の意味的な分類を考慮することとした。

②仮想空間から抽出する魅力ある景観構成要素については、主として一次集計の結果とクロス集計の結果から抽出することとした。これらの検討作

業より抽出された構成要素を、後続の空間設計作業における物理的・具体的なフレームとして設定する。

4. 実証的検討

本研究における方法論を、地方都市である滋賀県坂田郡米原町を対象に適用し、実証的検討を行なうことで、その有効性を検討することとした。

(1) 対象景観に関わる地区類型化に関する考察

対象地域である米原町は、将来像として“交流文化公園都市”を掲げている。この将来像にもとづいた形での土地利用構想案を考慮し、米原町が持つ、湖、田園、山林等といった景観特性を反映した地区景観分類を行なった。

本研究では、この分類の中でも景観整備を実施する対象地区を地域住民に対するニーズ調査をもとに設定することとした。

その結果、①公園②湖岸地区③駅前広場④住宅街⑤宿場町の5つの地区について景観整備目標を設計することとした。

(2) アンケート調査項目に関する考察

本研究では、先に選出された5つの地区について、魅力ある空間設計のための景観構成要素の抽出、および景観整備目標設計を目的としたアンケート調査を行なった。

そのため、地域のコンセプトに比較的適合した全国各地の事例を多数収集して、KJ法により4枚に集約した写真をもとに、地域に求められる景観イメージの把握を行なった。

ここでは、公園での4枚の写真の中で人々が、米原町の将来像に特に適合していると判断した写真について考察することとする。一次集計の結果により、その写真を選ぶ理由となった要素を見ると、花木、レイアウト、公園規模、見晴らしがあげられ、その理由としては、四季が感じられるから、華やかな感じがするから、自然が感じられるから、色彩に富んでいるからというイメージが多くあげられている。また、SD法により得られた評価項目の平均値を図-3に示す。

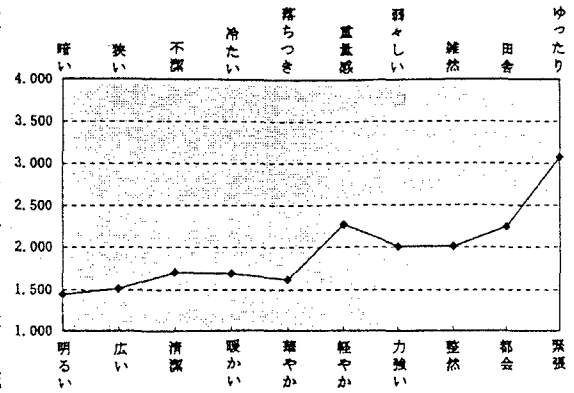


図-3 SD法による評価項目の平均値

(3) 因子分析およびクラスター分析による考察

因子負荷量のバリマックス解について概観する。本分析では、累積寄与率が55%以上になるように因子軸の設定を行なった。その結果、4つの因子軸でこの公園の景観意識は説明できると考えられる。因子分析結果は、表-1に示すこととする。

次にこの因子負荷量を用いてクラスター分析を行なった。この結果と因子分析の結果を用いて、4つの因子軸の軸名称を設定することとした。その結果は表-2に示すようになった。第1因子軸は快適性を表す因子軸、第2軸は存在性を表す因子軸、第3軸は美観性を表す軸、第4軸は力量性を表す軸と設定した。

つまり、将来米原町で求められている公園像(イメージ)は、「快適性」、「存在性」、「美観性」、「力量性」という、この4つのイメージで構成されていると考えられる。

表-1 因子分析結果

公園イメージ	因子 1 軸 因子負荷量	因子 2 軸 因子負荷量	因子 3 軸 因子負荷量	因子 4 軸 因子負荷量
明るい・暗い	0.4274	-0.6029	0.3031	0.417
広い・狭い	0.1931	-0.8304	0.2413	0.2765
力強い・弱々しい	0.1894	-0.4112	0.3395	-0.0824
整然・雑然	0.346	-0.1484	0.5157	0.0688
暖かい・冷たい	0.9055	-0.1849	0.2018	0.2638
清潔・不潔	0.3258	-0.3284	0.4954	0.3656
華やか・落ちついた	0.29	-0.2408	0.2124	0.6463
都会・田舎	-0.0427	-0.176	0.7699	0.2016
軽やか・重有感	0.0733	-0.0413	0.0532	0.5202
緊張・ゆったり	-0.4841	0.3533	-0.0329	-0.1639

表一 2 因子軸と因子負荷量の高い評価項目

因子	評価項目	
1 軸 快適性	明るい感じ	暗い感じ
	暖かい感じ	冷たい感じ
2 軸 存在性	緊張した感じ	ゆったりした感じ
3 軸 美観性	整然とした感じ	雑然とした感じ
	清潔な感じ	不潔な感じ
	都会的な感じ	田舎っぽい感じ
4 軸 力量性	華やかな感じ	落ち着いた感じ
	軽やかな感じ	重量感のある感じ

(4) 公園における景観整備目標に関する考察

以上の結果を総合的に考察すると、将来米原町における公園の景観整備は、快適性に影響を及ぼしている評価項目に関しては、明るい感じ、暖かい感じが望まれている。また存在性、力量性に影響を及ぼしている評価項目に関しては、ゆったりとした感じ、華やかな感じが望まれている。美観性に影響を及ぼしている評価項目に関しては、整然とした感じ、清潔な感じ、都会的な感じが望まれている。

以上の結果を考慮して、将来米原町における公園の整備は、美観性に関しては、例えば、トイレやごみ箱等の衛生面も考慮して清潔感あふれる整備をおこなうことが必要ではないかと考える。快適性に関しては、例えば、季節感を感じさせるような色とりどりの花々や高さや種類の異なる植栽を充実し、アクセントを持たせた公園整備をおこなうことが必要であると考えた。存在性、力量性に関しては、例えば、地域に根付くようなどっしりとした存在感を持ち、心身ともにリフレッシュすることのできる大規模な公園の整備をおこなうことが必要であると考えた。

上記の考察を総合的に取りまとめると、対象地に望ましいと思われる公園の景観整備目標は以下のようなになる。すなわち、

- ① 広く見晴らしが良いこと
- ② 四季の感じられる色とりどりの花があること
- ③ 公園を散策できる清潔な感じのする遊歩道を整備すること
- ④ 回遊しやすく、見た目もきれいなレイアウトであること

⑤ 噴水や池など公園のアクセントとなるものがあること

⑥ 公園全体がゴミがなく、清潔に保たれるよう整備すること

を兼ね備えたものが理想と考えられる。

5. おわりに

本研究においては、住民の意見を都市計画マスタープランの段階で盛り込むという考え方のもと、地元住民の意向を考慮するというボトムアップ的な手法を用いて、景観整備計画における方法論の1つが提案できたと考える。またこの手法により、構想計画段階で住民の意見やニーズを反映させることも可能であると考えた。次に、それぞれの地区の景観イメージを求めるために、いくつかの形容詞対を用いて、人々の景観評価意識を明確にし、因子分析によってその地区ごとに、4、5種類の望ましい景観イメージを設定し、景観整備目標設計のための有益な情報となったと考えられる。

今後の課題としては、本研究が地区景観整備目標を設計することにとどまっているため、今後この整備目標をもとによりイメージしやすいようにビジュアルな地区の景観設計を行なっていく必要があると考える。

【参考文献】

- 1) 篠原 修：新体系土木工学、土木景観計画、技法堂出版、1990
- 2) 小柳、篠原 他：土木工学大全13、景観論、彰国社、1977
- 3) 春名 攻 他：都市環境の創造、法律文化社、1993.3
- 4) 川崎雅史：都市景観のメディアイメージに関する研究、京都大学学位論文、1992.8
- 5) 日下部 裕：景観認識にもとづく地域における幹線道路景観整備計画に関する方法論的研究、立命館大学修士論文、1994